

## 森田欣也の滑稽俳句（三）

小西昭夫

森田欣也さんは滑稽俳句によって、風通しのよい俳句の世界を作った。これまで紹介した俳句は、ぼくたちを笑わせてくれる楽しい俳句が多いのだが、森田さんの狙いが表面に出ている、読者の方も森田さんの狙い通りに笑ってくれる。しかし、それでお終いということも多いのではないだろうか。もちろん、それ等の俳句も高く評価しているのだが、今回はぼくが更に好ましく思う五句を紹介してみたい。

### こんな日に限って小春日和かな

「こんな日」がどんな日なのかは一切説明がない。しかし、「小春日和」なのだ。外出が楽しいはずだ。生憎、予定があつてこの日は外出がままならないのだろう。出かけることができた日は悪天候だったのかも知れぬ。「こんな日に限って」は口惜しさである。可笑しさは表面には出ていないのだが可笑しい。

### たこ焼きに二本の楊枝秋深む

上質の滑稽句である。表面的には、買ったたこ焼きに二本の楊枝がさしてあったことと、少し肌寒かったのだろうか秋の深まりを感じたということだけであろう。秋の深まりは物思いにふけったり淋しさを感じさせる情緒的な季節だが、その秋の深まりを感じさせるのがたこ焼きにさされた二本の楊枝である。情緒も何もない。このあつけらかんとしたところが何とも可笑しいのだ。森田欣也恐るべし。

### ステージはにんじんの上月鈴子

この句も可笑しくした句ではない。「月鈴子」は「げつれいし」と読むが「鈴虫」のことである。月鈴子の名前を使っているので、月夜のにんじん畑が想像できる。そのにんじんの葉の上で鈴虫が鳴いているのだ。しかし、にんじんの葉の上とは書いてない。赤いにんじんの上とも読める。虫の鳴く場所をステージと呼ぶことは多いだろうが、それがにんじんの上であることが笑いを誘う。切ない笑いだ。

### 春風はセンター前へ抜けて行く

お洒落な句である。ピッチャーの投げたボールを見事に弾き返した白球がセンター前に抜けていく光景が目には浮かぶ。しかし、センター前に抜けて行ったのは白球ではなく春風なのだ。美しい句だが、やっぱり、春風がセンター前に抜けるのは可笑しい。これが森田欣也のセンスだ。

### ああ海よクリームメロンソーダ水

今の若い人たちのことは知らないが、ぼくたちの青春時代の飲み物といえばメロンソーダだった。ちょっと贅沢をした時がクリームメロンソーダだった。あの緑の液体を炭酸が上って行く感じが海を連想させたのだろうか。それにしても、「ああ海よ」とは何と大袈裟な。それが可笑しい。目の前には好きな女の子がいたのだろう。森田欣也愛すべし。